

入の一念(信の一念)を根底として上は念佛の教法を二廻向四法と開顯し、下は眞化兩卷を開いて、三々法門を開展し、一代佛教の歴史的意義を明かにして是を新たな佛教史觀に統一したのである。従つて三願轉入も祖聖の個人心理の變遷として見るのは正確とは云へない。「勸恒沙の勸なれば信亦恒沙之信なり、故に甚難と言ふ」と小經隱顯釋下に云はれてある如く、單なる特殊宗教の入信の記録で無く、人類普邊の大道たる一乘大弘誓海との遭遇を慶嘆せられた者たる事、したがつて三願の眞假はそのまゝ大信心海の妙波瀾である事が知らるゝのである。それは更に、轉入の文に引續いて、「信知聖道諸教爲在世正法而全非像末法滅之時機、己失時乖機也。淨土眞宗者在世正法像末法滅濁惡群萌齊悲引也」と宣言されてある文を注意する時、正しく三願轉入は祖聖の佛教史觀を抜きにしては其の正しい意義を酌みとる事が出来ない事をいよく知らされる次第である。

親鸞の歸洛について

細川 行 信

今、歸洛の原因を『教行信證』の完成という前提の下に考察したい。淨土宗の要旨は『選擇集』に表わされ、且親鸞は師法然に全的歸依をし乍ら何故に一部六卷もの大部の書を撰述されたのか。恐らく此の事に關しては何か大きな理由が存在したに相違ない。而も、それが大部分の門侶に縁遠い漢文體である事や後序の「太上天皇」・「今上」・「皇帝」の上に空白を置いている事より窺えば本書が當時の佛教界に公表する爲の『選擇集』の眞意辯明書であつたと考える。随つて、これには何か當時淨土門にとつて大きな事件があり、それが直接動機となつたものと推測されよう。特に造意を示す後序の文中に承元法難に對する鋭い批判や信仰體験の表明等には承元の時以上の法難の惹起と其の法難に際し專修念佛者としての自己の立場の表明が必要であつたのであらう。かく考へて當時の念佛停止を調

べると法然滅後、建保・貞應・嘉祿・天福・延應(勅修御傳 卷四十三)等が主なもので、この中法難にまで展開したのは嘉祿三年の停止で大彈壓を蒙つた。この嘉祿法難の直接原因は上野國より登山した並榎の堅者定照が『彈選擇』を著して隆寛に示した處、隆寛は『顯選擇』を作り「猶若暗天飛瓦礫也」(淨土傳燈錄十三列傳定照)と大いに駭した。この事は定照を初め天台宗側をして激しい刺戟を與へた如く『禪選擇』が『永尊堅者狀』(金剛集所收)によれば『摧邪輪』に勝る書である(勝摧邪輪筆體之由人 義理慧足殊勝々中統)事を自認していただけに其の時の山門の怒りが察せられる。かくてこそ法然の墳墓破却から隆寛・空阿の配流を初め、專修念佛者餘黨の擲出、更には『選擇集』の板木焼却に至る徹底した彈壓が實行される事となつた。處で此の嘉祿の停止は貞應三年(元仁元年)のいわゆる貞應の停止と密接不離のものであつた事は空阿の關外追出や洛中の黒衣法師の停止を中に狹んで嘉祿の停止に進展しているのであり、宮崎博士が「この元仁元年の年紀は、當年の念佛停止と深く關聯するものがある」(觀谷史壇第三十四號教行信證に現はれたる元仁元年の年紀について)

と指摘されたのは誠に當を得た見解である。然し此の年紀が其儘起稿された年とする事には、元仁元年の停止が餘り實行を伴わず特に親鸞の住した東關に彈壓の手が伸びたのは嘉祿三年十月已向であり(嘉祿三、十、十武藏守へ宛てた文書によれば)同年(は地頭、守應にその彈壓方を依頼している)同年には法然の後繼者たる信空が他界し、更に親鸞の敬慕する「ヨキヒト」たる隆寛が死去し更には其の八年後同じく「ヨキヒト」で會つて嘉祿の停止に淨土宗に對する深い理解をもちつゝも其の地位上より彈壓者側に立たされた聖覺(永登狀・宗源大僧郡狀(天日本史料))さえも逝去するに及び茲に眞實の四法を開顯すべく二十年もの東國生活に別れを告げて歸洛を決斷されたもので、その年次は大體『高田正統傳』の記事を信すべく「同年(嘉禎元年)八月四日聖人入洛也」とある記事は『正統傳』の史料價值が低いものとしても或は古くからの説を傳へたものではなからうか。

彙報

眞宗學會

◆卒業論文發表會 二月十九日

一時於研究室

眞宗に於ける六字釋

長田 龍照

眞實教に就て

大高 眞洋

韋提權實に就て

堀江 伸知

皇太子聖德奉讓に就て

木村 毅

善導に於ける三心釋の研究

臼井 元成

六字釋の研究

富樫 雅好

二種深信

平松 宗顯

尙同日午後六時から木村にて、卒業

生豫餞會を開催、稻葉教授の御出席を

得て盛會であつた。

佛敎學會

◆二月二日 例會 於會議室

「勝鬘經における如來藏思想」

發表者 大學院 香川孝雄氏

引續いて、ストーガを圍んで卒業生

を送るなどやかな集ひをもつた。

◆「佛敎學會々報」第八號は三月一日刊行された。

◆五月四日 新入生歡迎會 於會議室

山口教授の「最近のヨーロッパにおける佛敎研究の業績の二三について」と題した談話があり、その後夕刻まで歡談する。本年度は二十餘名の新入生を迎へ、學會として大いに意を強うする

佛敎史學會

二月三日(木) 於會議室

◆昭和廿九年度卒業論文發表會(第一次)

(發表者) 一色・乾・遠藤・大村・佐々木・杉田・園村の諸君。

◆二月四日(金) 於會議室

卒業論文發表會(第二次)

(發表者) 高柳・高山・橘・林・細川

横田・吉田の諸君。

◆二月十九日(土)

卒業生送別會(於枳穀邸)

◆三月十日

卒業生送別史跡踏査

藤島教授指導、八幡町神應寺・男山八

幡宮・善法律院・八角院・松花堂見學